

私は「脳死は人の死である」という問に対して即答できなかった。自分の脳の機能が不可逆的に失われたら、もう私は存在しないから死であると思う。しかし、もし夫やわが子が脳死と判断された場合、人工呼吸器を装着していながらも、まるで生きて眠っているかのような姿を目のあたりにしたら、「死んだ」と受け入れることはできない。医学的には「脳死＝死」だとされているが、その人の尊厳はなくなった後も保持されるべきだと思う。もしこれから先、脳死の状態にある患者さんの看護をすることになったら、その患者さんの生き方や家族の思いを把握して最期の別れの瞬間まで、その人らしさが保てるような援助をしていきたい。脳死後の患者さんの家族に対しては、これまで一般的であった「心臓死」とは全く違う状況に対し受け入れられない思いがあることを知り、受容過程を支えられるような関わりができたと思う。そのためにも自分自身で生きること・死ぬことについて考えたり、家族や友人などと一緒に話し合うなどの機会を持ち、人間性を養って生きたい。

また、延命治療について「生命の尊厳」と「人間の尊厳」の二つがあることを学んだ。医学の進歩によって以前なら救うことができなかった病が治り、また、生命を維持することも可能となった。そんな中で、体は生きていても、その人らしい生き方が出来ていない、人格の尊厳が守られていない状況が作り出されることもある。

私の祖母は長い間、脳梗塞・認知症を患いベッド上生活となった。危篤の知らせを受けて祖母のもとを訪れたとき、されていたのは点滴だけで、私はそのとき「なぜ、もっと治療をして救おうとしないんだろう。」と一瞬思いました。





しかし、それはずっと一緒に暮らして一番祖母のこと知っていた叔父が「おふくろは積極的な治療をのぞんでなかったから・・・。」と、祖母の思いを代弁していたからだということを知った。祖母が亡くなる時、私には生後間もない乳児がいて一晩みんなで同じ部屋で時間を共有することができた。その時に、介護士さんがさりげなく飲み物を運んできてくださった。そのさりげない心遣いがとてもありがたく、本人にとっても私たち家族にとっても穏やかなひと時を過ごせたと感じた。この経験から、積極的な治療を必要とするときばかりではないこと、自分がこれから看護師として働くうえでの姿勢を学べたと思った。さりげない気遣いをしてくださった介護士さんのように、患者さん・家族に共感し寄り添える看護をこれからしていけたらと思う。

医学が進歩する中で、臓器移植をはじめ治療において様々な選択をすることが可能となってきた。それと同時に、一人ひとりが意思表示することが自分の生き方を示す上で重要なことになっている。私たちは、患者さんが自分の治療について十分に理解し、その人にとって一番良い方法を選んでいけるように医師や他の医療従事者とともに情報提供・サポートしていく必要がある。また、自分で意思表示することができない人達の生きる権利が医療・治療という名のもとに損なわれていないかを常に振り返りつつ援助をしていくことが求められると考える。

講義の中で移植医療を取り巻く倫理的問題について考えたが、これから実際働く中でも問題意識を持ち、自分に問いかけ成長していきたい。

